

ブドウ「あづましずく」の新梢生育特性と摘心効果

福島県農業総合センター 果樹研究所

1 部門名

果樹 - ブドウ - 生理・生態

2 担当者

佐藤 守

3 要旨

「あづましずく」では、着粒不良となることがある。摘心は着粒を安定させる上で効果的な技術であるが、摘心と新梢生育との関係は不明である。また成熟期が盛夏期となるため、着色が遅れ、赤味が残る場合があるが、摘心と着色との関係も不明である。そこで「あづましずく」の適正な摘心方法を探索するため、時期と強度を変えて摘心処理を加え、摘心と新梢生育および果実品質、特に着色に及ぼす影響について検討した。

- (1) 新梢長と展葉数の1日当たりの増加量のピークは、新梢長より展葉数が遅れ、その差には年次間差が認められた。新梢伸長は、満開前3日から満開後13日の期間に旺盛となった。このことから開花期の摘心は新梢生育の年次間差を調整する効果が期待されるものと考えられた。
- (2) 節間長は、第3～6節間いずれにおいても節の出現から約30日で伸長がほぼ停止し、第6節間までは展葉開始後45日(満開期)までに節間伸長が終了した。このことから開花期の摘心はこの部位の節間伸長には影響しないと考えられた。
- (3) 摘心の新梢葉への影響は強摘心区で認められ、無摘心と比較して7節位葉から摘心節位までの葉面積が増加した。摘心処理間では摘心部位から3節までの葉面積で差が認められ、満開期強摘心が優り、開花始弱摘心が劣った。
- (4) 摘心の果実品質への影響は、粒重、糖度、着色、着粒数で認められたが、年次間差が認められた。果粒肥大効果は6葉期摘心と開花始の強摘心で明瞭であったが、糖度、着色で劣る年が認められた。満開後7日の強摘心は着粒数が劣った。満開期弱摘心では、果実品質が安定していた。
- (5) 着色(果皮色)は着粒密度、果房重/総葉面積比、果房重/総葉数比、第2、3節位葉面積合計、1番枝本葉(第3～13節位葉)の平均葉面積とは正の2次回帰、糖酸比とは正の単回帰、粒重とは負の単回帰関係が認められた。また着色開始10日後から収穫日までの平均気温と正の2次回帰関係が認められ、26.5℃以上の年で著しく着色が抑制された。
- (6) 以上から、「あづましずく」の着色は満開後40日頃までの果房への同化養分の集積と着色開始10日後から収穫日までの平均気温の影響を強く受けることが明らかとなった。

4 主な参考文献・資料

- (1) 平成21年度試験成績概要(2009)